

## 立教で坐禅を？

佐藤 研

私は2014年3月に立教大学を定年退職する者であるが、それと共に、ささやかながら試みてきた一つの実験が終わることになる。それは学生たちに「坐禅」を伝えることである。

私は1998年に新座で「コミュニティ福祉学部」ができたとき、文学部から移籍してそれに加わった。しかし私の専門はいわゆる「福祉」ではなかったので、その翌年一種のゼミ形式の授業を担当しなければならなくなったとき、はたと困った。そこで、何か間接的に「福祉」に寄与できることはないか考え、私がそれまで関わってきた「坐禅」を始めた。それ以降、2009年に文学部に再移籍するまで、コミ福で（とりわけ三年次生の専門演習にて）坐禅のクラスを担当した。毎年平均して10名くらいは受講し、実際に坐ったであろう。

文学部に再移籍した2009年以降は、全カリの「宗教と実践」（2009-2011年度は「坐禅入門」）の枠内で再び坐禅をやることになった（しかし、場所は部屋の都合でいつも新座であった）。これには毎回30名の、抽選に通った学生が来ることになったが、応募者は毎度100名を超えたと聞く。実際に来たのは9割5分が新座の学生であった。気づいたらもう5年も続けており、今年前期でめでたく最後の授業が終了した。1999年から数えると、何と14年間——ただし1年間の休暇時を除くと13年間——続いたことになる。その間、坐禅の基本を教えて実際に坐ら

せ、また、坐禅の背後の歴史や坐禅の意義などについても語ってきた。それがどれだけ功を奏したか分からない。実際、ゼミの授業を終了してもなお坐禅を続けて今に至っている者は皆無であると思う。残念と言えば残念である。

なぜといえば、坐禅こそ、言うなれば精神的次元の無形「世界遺産」と呼んでもいい、とてつもないポテンシャルを有する人間学的行為だからである。坐禅はそれ自体宗教ではなく、誰でも肉体を持ったホモ・サピエンスならできるものであるが、たまたま禅宗という宗教体制によって今にまで伝えられてきた。しかし原則的に、どのような宗教体制によって担われることもできるし、またいわゆる宗教の枠なしにも伝播可能である。それだけ普遍的な質のものである。ただし、今の日本で坐禅が新聞などで取り上げられる際には、健康によいとか、ストレスマネジメントに有効であるとか、その程度の扱いでしかない。それは坐禅の裾野の効用である。それを否定するつもりは全くないが、実は坐禅の中核の意義とは、私たち自身の存在論的実相の発見とその修得開陳にある。いわば、「意識」というもののラディカルな革命を実行することが主眼なのである。この点はうまく説明することはできないので、実際に体験してもらいたい。実際、人々は古来これによって人生における「自己」の課題とその「死」の難問を体験的に解決してきた

のである。今ではそれをまともに受け取る人がほとんどいなくなってしまった。日本の禅はまだ一定の「カルチャー」としては存続しているものの、この中核的探求の機能を事実上は放棄してしまったと言える。それを何とか変えることはできないか、と求めて立教で学生諸君相手に坐禅の手ほどきをしたのであるが、事態はそう甘くはなかったと言える。

現代においては、むしろ日本以外の欧米で坐禅がたいへん盛んである。すでに1970年代から顕著になった事態であり、今では恒常化したと言ってよい。日本で真剣に坐禅に取り組んでいる人たちは、もしかしたら何百人かはいらるかもしれないが、欧米ではその数は全体を合わせるとおそらく数十万に上るのではないか。おまけにその半数程度は何とキリスト教徒が主体なのである。この現実には、未だに日本では十分注意が払われていない。要するに、坐禅の世界的中心は既に日本を離れてしまい、「禅宗」を飛び越えてしまっているのだ。おそらく、あと2、30年もすると、欧米で装いを全く新たにしたZenが、日本に逆輸入されるであろう。また、日本人でありながら、本当に禅を修得したくて欧米に「禅留学」する者も現れるであろう。

つまり、「禅」に関して、今の世界では啞然とするような革命が進行中なのである。その流れの中に日本人が入っていないのはかえすがえすも残念である。願はくは立教大学の学生諸君が、そうした意味の「最先端」にも着眼してくれればいいのだが、と秘かに願いつつ、私自身は懐かしい学舎を去ることになるだろう。

さとう みがく  
(本学文学部教授)